

FIT チャリティ・ラン 支援先団体インタビュー

第2回(全2回)

FIT チャリティ・ラン 2016 実行委員会

『国際金融 1293号』に引き続き、FIT チャリティ・ランの支援先インタビューをご紹介します。地域に根ざした、社会的に意義ある活動をしているものの、認知度等の問題により十分な活動資金を確保できていない団体への寄付を通して社会貢献を行っている FIT チャリティ・ラン。2016年の実行委員会が行ったインタビューでは、非営利団体で活動している「人」に焦点を当て、どのような思いで団体を設立・運営し、どのような経験をし、どのような人々が集まって団体としての活動を行っているのかということを中心にお話を伺っています。活動をされている「人」の生の声を通して、決して特別なわけではない個人が、いかに社会的インパクトを与えるような活動をしているのか。「私たちにも何ができるのか?」といったことを考えるきっかけの一つとしていただければ幸いです。

第3回

特定非営利活動法人 BOND プロジェクト

代表 橘ジュン様、スタッフ 竹下奈都子様、フォトグラファー KEN 様

「特定非営利活動法事 BOND プロジェクト」は、虐待、いじめ、性被害、自殺願望など深刻な問題を抱えている若年女性を対象に、メールや電話、面談、繁華街に向かう際の声かけなどを行い、様々な声を聴くことで、彼女たちが自分を表現できる居場所をつくる活動を行っています。また、そうし女の子たちのリアルな「声」を伝えるフリーペーパー「VOICES MAGAZINE」を出版したり、必要に応じて他の支援機関へ繋ぐなどといった様々な支援活動を行っています。

<http://bondproject.jp/>



(左から) BOND プロジェクト フォトグラファーの KEN さん、代表の橘さんと竹下さん

FIT：活動を始めた経緯や、当時の想いなどを教えてください

橘：以前から家に帰りたくても帰れないなどの色々な悩みを抱えている女の子に街で話しかけたり相談に乗ったりしていましたが、ある日、妊娠した女の子に出会ったことがきっかけとなりました。

彼女は子どもを宿している状態なのに、街に立っていました。相談所を探せば何とかなるのではと思っていましたが、予約をしないと来てもらえないことが分かりました。「こんな時すぐに病院に一緒に行けたり、相談ができる場所があったら」と思い、BOND を立ち上げました。悩みを抱えている女の子の話を聴いていても、何も出来なかつ

たことがいやでした。

FIT：団体の最近の活動内容について聞かせてください

橘：FIT からいただいた資金で「BOND 車」を買い、大活躍しています。

例えば、ツイッターに「家出しちゃった。置いてくれる人募集します。少女 4 万円で売ります。」という、女子中学生の投稿がありました。幸い、BOND をご存知の方がその女の子と私たちを繋げてくださり、彼女と連絡を取り合う中で、居場所を突き止めることができました。「BOND 車」でその子を迎えに行き、無事 BOND の保護室へ戻り、一週間後児童相談所に行きました。援助交際をすることから彼女を救えました。

FIT：探偵のような活動もされるのですね

橘：そうですね。時間がすべてです。車だとすぐ迎えに行くこともできるし、私たちが動きながら相談できるということがいいですね。最近は車で全国色々なところへ相談に行っています。すぐ移動できるので、安心して面談させてもらえるということがいいと思います。まだ車は使い始めたばかりですが、これからも色々充実させていければと思っています。

FIT：繁華街で女の子たちに話しかける時に警戒されたりはしませんか

竹下：無理な子は無理ですが、大丈夫な子はすぐ「はい」といって話を聞いてくれます。私たちが話しかけに行った時にどんな態度をされるのかは、その子たちがどんな大人と向き合ってきているのかにもよると思います。日常会話から始めて、「今日はなんで渋谷にいるの?」と聞いて、「VOICES MAGAZINE」を見せて、私たちの活動を話したりすることも多いです。

FIT：相手が喋らなくなったり、気まづくなったりはしませんか。

橘：それでもいいのです。無言であることも「声」なので、私たちはいつも待っています。「声」を出せない女の子もいますし。

竹下：女の子に話しかけた時、黙って何を話したいのか分からない時は、きっと色んなことを考えています。忍耐力が必要ですね。

FIT：KENさんはVOICES MAGAZINEに乗せる女の子たちの写真でどんなメッセージを伝えようとしていますか？

KEN：何かを伝えると言うより、本人が気に入るような写真を撮ろうとしています。撮った写真を女の子たちに見せて、気に入ってもらえない場合は使いません。ただ、撮影に入る前に、必ずその子たちの話を聴きます。女の子たちの悩みや話を聴く前に写真は撮りません。

橘：取材と悩み相談は、いつもKENさんに付き合ってもらっています。

FIT：相談の内容がつかなくて、ご自身が落ち込んだりすることはありますか

竹下：それでもやはり一人で悩むよりは誰かと話を共有し、一緒に考えた方が良いので、独りじゃないと気付いてほしいです。

橘：「ただ聞く」ということはすごく難しいです。「なんとかしたい」という気持ちも強いですが、「まずは聞こう、ただ聞こう、そしてまた会えるって信じよう。」それしかないのです。実際そうやって何回も会っている女の子もたくさんいますので、こうやってずっとやって行くしかないと思っています。

FIT：活動をしていて嬉しかったことはありますか

橘：二年前、「死にたいと思っていた」という看護師さんが面談に来てくれました。私たちと話した後、「死にたいという気持ちを抑えられた」と言ってくれたのですが、その気持ちがまた盛り上がったということで、昨日突然 BOND の相談室を訪れてくれました。彼女は看護師なので、色々な医療機関を知っていると思いますが、BOND を選んでくれたのです。「BOND に話を聞いてもらいたい」と言われた時はとても嬉しかったです。

FIT：活動についての情報が広まって、相談を求める人が増えているのでしょうか

橘：それも多いですし、最近はキーワード検索で

「死にたい、消えたい」と検索すると BOND が出てくるようになっており、それを見て BOND に連絡してくる方も少なくないです。SNS で BOND のことを知ってもらうこともあります。活動をすることで、それだけ支援の機会が増えていくと思います。

第5回

特定非営利活動法人 スマイリング ホスピタル ジャパン

代表理事 松本恵里様

「特定非営利活動法人スマイリングホスピタルジャパン」は、小児医療の現場に笑顔と笑い声が当たり前にある社会を目指し、さまざまな分野のプロの芸術家が、病気や障がいと闘う子どもたちにアートと触れ合う機会を提供している団体です。

<http://smilinghpj.org/about/index.html>



(左から) 松本恵里さん (スマイリングホスピタルジャパン代表理事)、Tae Ahn (FIT 2016 広報チーム副実行委員長)

FIT：スマイリングホスピタルを立ち上げた経緯を教えてください

松本：設立を決めたのは院内学級の教員時代に出会った子どもたちとの関わりがきっかけです。病気なのに弱音も吐かず、勉強も遊びも頑張る彼らの姿を素晴らしいと思いました。そもそも、幼い子どもが重い病に罹ってしまう不条理に、やり場のない怒りを感じていました。子どもたちは教科学習も行事も頑張っていました。一番笑顔になるのは音楽や美術、芸術鑑賞会の時であることを確信し、団体を立ち上げました。教員免許取得を目指して勉強していた頃に私自身が交通事故に遭い、二年近く入院とリハビリで辛い時期を過ごした経験と、配属されたところが院内学級であることを考えると運命的なものを感じます。

FIT：様々なアーティストさんに参加していただくことの良さは何ですか？

松本：プロのアーティストによる本格的なアートに触れることで、退屈な入院生活にエッセンスを加えられることです。また、子どもやお母さん方の笑顔を見られること、アーティストさんたちの温かい心に触れられることです。例えば、アーティ

ストさんたちが大道芸を披露した時の子どもたちの笑顔を見て、お母さんたちも笑顔になります。「そうしたお母さん方や子どもたちの姿を見ること自体がお給料」だと仰るアーティストさんもあり、本当にありがたいと感じています。

FIT：例えばどんな大道芸をされるのですか？

松本：お医者さんたちを巻き込んで協力してもらうこともあります。普段痛いことをするお医者さんがマジックを失敗する時、子どもたちはまるで鬼の首を取ったかのような喜びようです。お笑いのポケとツッコミのようで、全員が「わー」と笑っています。

FIT：ボランティアに外国人が多いようですが、どのような経緯なのでしょう？

松本：ボランティアのアーティストの中に現在、外国人が3人います。パフォーマンスを主に担当しています。英語教員をしていた頃、マジシャンでもあったALT（外国語指導助手）と知り合い、一緒にスマイリングホスピタルの活動をしてみないかと声をかけたことがきっかけです。その彼が他の外国人にも声をかけるなどして増えてきました。

FIT：他の団体と情報共有はしますか？

松本：はい、横の繋がりも大事です。他の団体さんと話すことで、自分の団体をより豊かにできる為のヒントを頂くこともあります。

FIT：最後に、FIT チャリティ・ランに参加する方々をはじめ、皆さんにメッセージをお願いします

松本：「大人として子どもたちに何かをしてあげたい」という気持ちで始めたのですが、子どもたちは病気のため体が不自由で、一番遊びたい時に動くこともできず、つらいはずなのに頑張っている姿を見ていく中で、たくさんのことを学ぶことができました。子どもたちのおかげで、私はこの活動を「させていただいている」のだという気持ちに変わっていきました。子どもたちが頑張って生きていく姿勢は、大人として学ぶべきことが多いと思います。その現場をFITの皆さんにも是非ご覧いただきたいと思います。

第6回

NPO 法人聴覚障害教育支援 大塚クラブ

事務局長 高山嘉通様

「NPO 法人聴覚障害教育支援大塚クラブ」は聴覚障害のある子どもたちの学校外活動や家庭支援を中心に生活環境を改善し、社会性や自立心を養うことに取り組んでいる団体です。

<http://www.rougakkou.com/>



(左から) 嶋倫子 (FIT 2016 広報チーム)、高山嘉通さん (大塚クラブ事務局長)、松方留美 (FIT 2015 共同実行委員長)

FIT：大塚クラブを立ち上げた経緯を教えてください

高山：聴覚障害をもつ私の娘が1歳の時に色々病院を巡り、最終的にこの大塚ろう学校の門を叩いたのが始まりです。自営業で普通のサラリーマンより自由があり、学校に入りびたり、PTA 役員を経て会長となりました。

聴覚障害児が通うろう学校は普通の学校に比べ学力が2~3年遅れているのが当たり前と言われていました。補聴器性能の向上と進路の多様化もあり、親御さんによる「ろう学校離れ」が深刻でした。娘が入学した時はたった一人だけの学級でした。そこで「子どもたちのために何かしよう」と思ったのが大塚クラブを作るきっかけでした。

支援に関わる人は、1)将来ろう学校の先生を目指す、専門性を持っている学生や先生、2)専門性はないが、見守りや日々のお手伝いをする地域のボランティア、そして3)私のような聴覚障害の子どもを持つ保護者がいます。

FIT：具体的にはどんな風に活動をはじめられたのでしょうか

高山：勉強の遅れをどう補うか、当時の仲間で話し合いました。まず、ろう学校に聴覚障害の先生が少なく、コミュニケーションの質と量が乏しいことに気付きました。ろう学校では今は手話を使いますが、昔は使われておらず、声を出させていました。音は何も入ってこないのに。

声の訓練も必要ですが、それよりコミュニケーション能力を養わないと何も伝えられない。そこで、手話も取り入れ始め、既に社会に出ている聴

覚障害者にご協力頂き、ロールモデルとして勉強というよりは一緒に遊んでもらうことをしました。そうすると子どもたちも将来が見えてくる。コミュニケーションもできるようになる。そこからスタートし、ことばの種となる知的好奇心を刺激するようなことも始めました。

FIT：当時のご自身についても教えてください

高山：当時、私はイベント制作会社のツアーマネージャーとの兼業の身でした。半年は休みで、半年は日本中を回っているような生活で、このままでは大塚クラブのことができないと思い、大塚クラブを法人化する時にその仕事を辞めました。学校の近くに事務所兼自宅を借り、それからは家族で大塚クラブにどっぷりでした。娘には兄がいますが、大塚クラブの北海道キャンプなどでは撮影などを担当させました。今では私より手話が上手です。

FIT：大塚クラブという名前の由来を教えてください

高山：大塚クラブの前身は大塚ろう学校 PTA ですので、名前は「大塚ろう学校」という学校名＝地名にちなんでいます。「大塚」は聴覚障害者の中では有名です。PTA での活動に限界を感じ始めた頃、補助金を頂くには法人化した方が良いということで、一念発起して NPO にすることを決め、私も含め「大塚」出身者がいたこともあり、名前は残しました。

FIT：2005 年の設立後、大きく変わったことはなんでしょう

高山：一番は法人化です。法人化するきっかけは平成 16 年から 3 ヶ年、放課後や週末等での様々な体験活動や地域住民との交流活動等を支援すると発表した文科省による「地域子ども教室推進事業」の実施でした。

それまでは年間予算 15 万円程、48 人の PTA 有志が集まり始まった活動です。法人化することで、17 年には 380 万円、翌年は 510 万円の補助金いただくことができました。その 2 年で人脈、講師、備品、会費のオンライン決済化などが進み、他にも次のプログラムやそのための研究等を行うことができました。それにより、子どもの数、親の意識、取り組む先生の意識が変わり、48 人だった子どもは、現在 170 人まで増えました。

FIT：聴覚障害の子の就職について教えてください

高山：みんなを感じるより障害者雇用は景気が良いです。雇用均等法もあるので好景気なのですが、残念ながら離職率も 50% と高いです。仕事はメールや筆談でもできますが、何気ない日常会話など、同僚とのコミュニケーションが問題です。

職種が何でも良いのであれば聴覚障害者の仕事はあります。しかし、私の娘のように夢を抱いていると、なかなか難しいです。

FIT：NPO を立ち上げて一番大変だったことを教えてください。活動を続ける原動力は何ですか

高山：事務局長として、団体の調整や段取り、物を揃えたり、資金繰りを担当していますので、申請した補助金が取れたりすると「やった！」と思います。ただ、その経験を重ねてみると、私たちが訴えたいことと、申請先が期待することは違うということも感じました。「社会に訴えるにはどうしたら良いのか」と色々勉強になりました。

大変だったことはあまり感じたことはありません。現在、主なメンバーは 7 人。2 人が元校長、2 人は大学教授、2 人は保護者で、後は私。校長先生は現役先生や子どもを動かす。大学教授は大学生を動かしつつ専門的アドバイスを。保護者はお母さん方が中心に活動する。私は段取りと資金繰り担当。それぞれの得意分野で活動しています。

FIT：学校等では校長の意見が強そうですが、実際はどうでしょう

高山：校長が変われば全て変わってしまう事もありますが、人が変わっても変わらないようにと、大塚クラブが支援を行っています。大塚クラブ発足当時の校長が手話を取り入れる事を決めたのは革新的なことでした。今は三代目の校長ですが、その校長就任時には既に手話を交えたトータルコミュニティと大塚クラブがあったこととなります。大塚クラブの活動で生徒が更に増え、生徒が増えれば先生も増える。進度別指導や個別指導もできるようになりました。

FIT：最後に FIT チャリティ・ランに参加する方々をはじめ、皆さんにメッセージをお願いします

高山：FIT の寄付金により、今までやりたくても出来なかったことへ投資することができました。大塚クラブのスタンスは当初も今も変わっていません。ありがとうございました。

(FIT ホームページ fitforcharity.org)